



# 未来への教科書

-For Our Children-

---

出前授業 2015

---



Media Team



復興支援メディア隊

# もくじ

## きずな

	堀有伸さん	NPO法人みんなのとなり組理事長・精神科医	【福島県】	2
	落合早苗さん	コミュニティサロン・ジョイナスアイビア代表	【宮城県】	4
	及川武宏さん	Three Peaks Winner（スリーピークスワイナー）代表	【岩手県】	6
	岩佐大輝さん	株式会社GRA代表取締役	【宮城県】	8

	渡邊さやかさん	一般社団法人「e...tora（リテラ）」代表	【岩手県】	8
	谷津拓郎さん	株式会社「E（イー）」代表取締役	【福島県】	10
	上田勝彦さん	株式会社ウエカツ水産代表・東京海洋大学客員教授	【福島県】	12
	長谷川純一さん	清水琢さん 人と種をつなぐ会津伝統野菜	【福島県】	14
	八木健一郎さん	有限会社三陸どれたで市場代表取締役	【岩手県】	16
	上原洋子さん	株式会社「E（イー）」代表取締役	【福島県】	18
	食を守る	プロジェクト	【福島県】	20

## ものづくり

	食を守る	プロジェクト	【福島県】	21
	食を守る	プロジェクト	【福島県】	22
	食を守る	プロジェクト	【福島県】	23

## くらし

	食を守る	プロジェクト	【福島県】	24
	食を守る	プロジェクト	【福島県】	25
	食を守る	プロジェクト	【福島県】	26

## 三井物産の東日本大震災復興支援活動

### 自由帳・ワークシート

「未来への教科書 -For Our Children-」は、震災直後から被災地の今、課題、未来をテーマに制作しているテレビ番組で、BS12ch THREE-TVで放送しています。

出前授業は、これまでに番組に登場していただいた人の中から、本企画にご賛同頂いた8人と1組の方の取り組みを「教科書」にし、登場人物と、実際に取材に当たった復興支援メディア隊メンバーと一緒に、中学校、高等学校を訪問し、1日先生として「生きるを育む」をテーマに授業をします。出前授業は対象地域の中学校、高等学校から受講希望を募り、選考した学校に対して実施します。私たちは子どもたちに大震災、そして今を生きる1日先生と生徒が直接対面することで、自ら考え行動する「生きる」力を育む一助となればと考えています。

復興支援メディア隊 代表 榎田竜路

## 震災以前のこと

東京にある大学病院の病棟で勤務をしていました。地震が起きた時も病院にいましたが、長く強く揺れたので驚きました。

## 震災から現在

病院には被害はありませんでしたが、東京で過ごしながらニュースなどを通して次々と入ってくる情報を、とんでもない事が起きてしまったという、気持ちの整理がつかない状況で見ていました。

その後、環境問題に取り組んでいた親友が、原発事故に強い衝撃を受け、福島県を支援するために相当熱心に活動するようになり、彼に誘われるような形で福島に足を運ぶようになりました。11月頃でしたから、震災直後から動かされた人たちから比べると、随分ゆっくりなスタートでした。

直接的な被災地の被害も大きいですけれど、私はどうしても人の心とか目に見えない部分がどういう仕組みでどういう風に動いているかという所をとても気にする人間なんです。原発事故とそれに関係する様々な状況を目の当たりにして、こういうのを繰り返すうちに日本は大変な事になると危機感を持ちました。東京で暮らしてもその不安は解消されないだろう。幸い医師免許を持っていたので現地に飛び込んでも受け入れてくれる場所があると感じたので、新しい勤務先を決め、平成24年の4月に南相馬に引っ越しました。この地域の精神科というのは、よほど重症にならないと患者さんは病院に来ないんです。なので、一見元気そうに見える人でも放置すると深刻な事が起きるリスクを抱えている。そこにアプローチしたいと思いました。

私が勤務を始めた4月中旬から旧警戒区域への住民の一時立ち入りが許可されるようになりました。20キロ圏内といわれている所

## 心理学の立場から 地域のお手伝いを

共存  
きずな

NPO法人  
みんなのとなり組理事長  
精神科医  
**堀 有伸 さん**  
【福島県】



堀 有伸 さん

精神科医の堀さんは、南相馬で様々な予防医学的な取り組みを試みている。ラジオ体操や心をケアするワークショップ、昨年は医療・福祉に携わる人を中心NPO法人みんなのとなり組を立ち上げ、理事長として活動をしている。被災した人やそれを支援する人の精神的な負担、ケアする取り組みを語つていただく。

### 中高校生へのメッセージ

広く心を開いて色々な人に影響を受ける、あるいは周りの話題になっている事に取り組む事も大事ですが、自分をしっかりと持って、何と言われても頑固に本当に自分の好きな事、やりたい事、欲しいものを追求する事も大切です。他の人にとって地味でも、自分にとって大切な事は大事にしてほしいですね。

## 将来のビジョン

私が一人で出来るのは精神医療に関して抽象的な所もある特殊技術や知識、テクニックなので、正直理解してくれる人は少ないけど、分かってくれる人が少しずつ増えていく事で環境は変わっていくと思っています。他にも多くの人のご理解とご協力を得ながら、広く運動を通じて健康への意識を高め、人と人の繋がりを強めるようなラジオ体操やウォーキング教室などの活動を行っています。それらと認知療法をはじめとした精神医学の技法が結び付いてくると良いなと思っています。

です。自宅を見に行つた方がその場で自殺されたというニュースが2件続きました。元来、南相馬にはとても強い、人と人の結びつきがありました。震災と放射能汚染、生活再建の遅れの問題は、この地のコミュニティに深刻なダメージを与えていた。そんな中での自殺のニュースはインパクトが大きく、何か活動をしなくてはと強く感じ、「みんなのとなり組」を立ち上げました。

この地のこころの問題に取り組み、うつ病や自殺の予防に取り組むものが私たちのミッションです。個人が悩みを抱えたままで孤立しないよう、昔の「隣組」が持っていたような人と人の結び付きを再生させようと活動しています。健康講座や交流会を開いたり、ラジオ体操を続けたりしています。

私の本職が精神科医で精神病理学や認知療法のような心理学の立場からこの地域にお手伝いしたいというのが基本的なスタンスです。本当に複雑な問題が起きているが、ゴチャゴチャになつたまま整理されていない。それを一つ一つほぐしていくという作業が私の出来ることだと思っています。

## ❖震災以前のこと

震災当時は、横浜市の鶴見区にある小学校で校長をしていました。鶴見区というところは海沿いの町で、今回の震災による津波被害の事が、どうしても他人事に思えませんでした。もし、自分の学校だったらと思うと、居ても立つてもいられなくて、とにかく現地に行つてお手伝いをしなきやという気持ちでいっぱいになりました。

## ❖震災から現在

# 羽ばたけ！ 希望の鶴

きすな

人を  
助ける

現地へ行こうと心に決め、まずは家族を説得し、勤めていた学校を3月末で早期退職しました。4月になつて学校の離任式で子どもたちへのお別れの挨拶を済ませ、翌日に石巻へ車に向かいました。石巻を選んだのは、当時は泊まるところがない中、テントサイトがあつたからです。石巻までの道のりは容易ではありませんでした。道は寸断されているし、ガソリンも思うように給油できない。止まつたところでボランティアをし、また進んでは止まつたところでボランティアをしてという繰り返しで、やつとの事でたどり着きました。

石巻で私を待っていたのは余りにも過酷な現実でした。子どもを捜す家族の声が今も忘れられません。家の片付けや泥を洗い流すお手伝いをしたり、写真や遺留品の整理のお手伝いをしたりというボランティアを続けました。

避難所生活は皆さんほとんどプライバシーが無い状態でした。ようやく仮設住宅での生活が始まり、プライバシーが確保出来たと思ったら、今度は孤独死や自死される方がいらっしゃった。その中には顔見知りの方もいらっしゃいました。コミュニティが壊れていると思いましたね。このころには地元の方々と色々な繋がりが出来ていましたので、皆で集まる場所が必要だと思い始めました。私はいづれ石巻を離ティアを続けました。

れる身。将来を見据え、まずは皆の居場所を作ろうと2012年6月に「コミュニティサロン ジョイナスアイトピア」を開設しました。そんな中、ひとつ被災地お見舞いの品が送られてきました。皆さんにお配りするために中を見ましたら、金と赤の立派な折鶴が出てきました。配させていただいたら、鶴を手にしたどの方も本当に明るい顔で喜んでくださったんですね。そのころ、仮設住宅の人たちは馴れない暮らしに疲れ、家の中でふさぎ込んでいる人も多かった。鶴を折っている間だけでも辛い事を忘れてもらおうと、鶴を贈つてくださった方を招いて折り方を教えてもらおうと考え、連絡を差し上げました。なんと贈り主は福田康夫元首相の夫人、貴代子さんでした。貴代子夫人は肩書を外して鶴を贈つてくださいました。その事が縁で鶴の折り方教室が実現しました。

希望の鶴と名付けた鶴は2013年になつて、仮設に暮らす人たちの仕事にし、販売を始めました。金銭的な支援ではなく、労働の対価として収入を得る事が自立に繋がると考えたんです。ボランティアは寄り添う事も必要ですが、自らの足で歩き出すお手伝いも大切なんですね。

## ❖将来のビジョン

私は最初、石巻の人のためにボランティアをやつていると勘違いをしていました。今、東南海地震など、私たちの身の回りに巨大地震が起きた時に、私の大事な人を守るために、私はボランティアをさせていただいているんです。これからは、自分のためにボランティアをする。私の大事な人を守るためにボランティアをさせていただこうと決めています。

## 落合早苗さん

落合さんは震災直後からボランティアとして石巻市へ入り、復興への手助けを続けている。被災地お見舞いとして届けられた赤と金色の豪華な折り鶴。送り主は福田康夫元首相夫人、貴代子さんだった。この鶴が地域や人々を繋ぐ「希望の鶴」となった経緯やこれからについて語つていただきました。



### 中高校生へのメッセージ

思った時に思った事をやってみるってすごく大事なんです。やろうと思ったのを今やらなかつたら、次にやろうと思わないかもしれません。自分の人生は一回しかありませんからね。

コミュニティサロン  
ジョイナスアイトピア  
代表

落合 早苗 さん

【宮城県】

# 自分で育てたブドウで 大船渡のワインをつくる

震災以前のこと

私は大船渡の生まれですが、震災当時は東京のコンサルティング会社で企業関係のコンサルタントをしていました。職場は新宿の高層ビル群の中にあるオフィス。辞めてバツクパッカーズという格安のゲストハウスを作ろうと考えていた矢先に地震が起きました。

震災から現在

当日は新宿のオフィスにいました。14階でしたのでかなり揺れました。徒歩とタクシーでやつとのことで埼玉の自宅に帰りました。古里の大船渡が大変な事になつてるのはニュースで分かっていました。実家の両親と連絡が取れたのは2日後の夜、東北にいる2人の弟も幸い無事でした。

5月に会社を辞めるまでは被災地に物資を運ぶなど、個人で支援活動を続けました。その後、東日本大震災復興支援財団に入り、最初に高校生向けの奨学金事業を作りました。震災が起きる前の環境は当然無くなりましたが、その環境によつて自分がやりたい事が出来なくなつた高校生が多くなると思ったんです。両親が働く環境がなくなつて自分もバイトをしなきゃいけない、その為に学校に行くことが出来ない。そういう子どもを一人でも無くようと、高校生が夢を諦めなくていいように、返済はいらない給付型の奨学金を作りました。

実は震災が起きた数年前からバツクパッカーズとともに、地元でのワイナリーの構想も温めしていました。財団の事業をやりながら地元に出来る事をやろうと、大船渡に戻る決心をしました。地域に外国人を呼びたいと思っていたんですね。僕もそうでしたが、大船渡の子どもたちは外の世界を知らない。幼い時から色んな視野を広げてもらいたい

い。だったらそういう環境を作つてあげようと。元々は東京にバツクパッカーズを作つてそこをハブとして東北に外国人を連れてきたい、と考えていたんですが、大船渡でワインの生産からワイナリーを軸とした観光ビジネスまで出来ないかと、考えたわけです。

ワイナリーをやりたいと考えた根底には、ワーキングホリデーで訪

れたニュージーランドで、ブドウ園で働いた経験もありました。小さなワイナリーが点在するその町には、海外から大勢の観光客がやってきました。その町と大船渡って似てるんですよ。

2013年5月、スリーピークスワイナリーを立ち上げました。ブ

ドウは植えてから収穫できるまで3年ほど掛かるので、他の農園から買い付けた果実で岩手県内の醸造会社でつくったワインを売つています。陸前高田市にあるリンゴ園も引き継ぎました。リンゴ園の木は老木が多く、手間はかかるんですが、美味しいリンゴがなるんです。

財団の仕事も継続していて、宮城のジュニアアスリート育成事業つていうスポーツを通して人材を育成する事業もやつています。

将来のビジョン

まずワインに関しては大船渡市内にワイナリーを作つて、自分で育てたブドウで大船渡のワインを作りたいというのがここ数年の目標。次に、子どものために交流人口を増やしながら三陸リアス海岸エリアにワインバーを作りたい。大船渡市つてスペインの小さな町と姉妹都市なんです。さらにリアス海岸もスペインが発祥なので、漠然と子どもたちが刺激し合える場所になつて欲しいと願う。及川さんに地域と農業の繋がりについて語ついてください。

及川 武宏さん



及川さんは震災後に東日本大震災復興支援財団に所属後、地元である大船渡市に戻った。三陸を思い出す美味しいワインを作りたいという思いから、ブドウ畑を始めた。リンゴ畠も譲り受け、シードルの開発も進めている。将来はワイナリーを通してこの地に多くの外国人が訪れる。子どもたちが刺激し合える場所になつて欲しいと願う。及川さんに地域と農業の繋がりについて語ついてください。

## 中高校生へのメッセージ

過去の事とかあんまり考えずに未来をしっかりと見て欲しい。今、自分が何をやりたいかを常に問いつけて、やりたい事を必死にやって欲しい。今、本当に何が出来るか、何がしたいか、自分の好きな事を好きなだけやってほしいなと思います。



Three Peaks Winery  
(スリーピークスワイナリー) 代表

及川 武宏 さん  
【岩手県】

# 豊かさとは なんだろう

ものづくり

モノを  
つくる

震災以前のこと  
大学、大学院と国際協力を学び、コンサルティング会社に入社しました。3年ぐらいで辞めますと言つて会社に入っていたので、4年が経過し、コンサルティング業務以外に、社内でのいろんな社会的な活動もやらせてもらつたので、そろそろ次のキャリアを考えようかな、というタイミングで震災が起きました。

## 震災から現在

震災当日は、都内で米国NPO法人のイベント実施の予定でした。大きな揺れがあつて、イベント会場の近くのテレビで地震の様子が映っているのを見て、これはイベントをやつている場合じゃないと思つて、関係者と連絡を取り合つてイベント自体は中止になりました。

その日の夜から、当日イベントを実施する予定だつた米国NPO法人の中で、そのNPOで扱つてある商品は、今の被災地でも求められるものだという事で、寄付を集める動きが始まつたのです。そのNPOで扱つていたのは、例えばソーラーランタンとかストロー型の簡易浄水器などたりしたのですが、そうした安価で社会課題を解決出来るような商品は、途上国だけでなく、被災地でも必要とされるものだよねという事になつたのです。次日の日から、寄付を集める活動が始まつたのですが、その一方で、まずはどここの地域で電気やガスが止まつてゐるか、何に困つていてどんなものを必要としているかというような事を私は調査をする相当になつたのです。

震災後に最初に東北に入ったのは友人がいた福島。その後現地に足を運ぶうちに、被災地の状況は開発途上国に似てゐるところもある事に気が付きました。なので、緊急支援のフェーズの後は産業支援が必要になるな、と考えました。これまでの自分の経験が生かせるんじやないかとも思いました。

6月に会社を辞め、様々な人と話をすると中で、三陸の沿岸部に自生している気仙椿と出会いました。気仙椿からは良質な油の抽出が出来るの

一般社団法人 re:terra(リテラ)  
代表  
**渡邊 さやかさん**  
【岩手県】



## 渡邊さやかさん

渡邊さんは大手企業でコンサルティング会社に入社しました。

震災を機に陸前高田に縁が生まれ、地域ブランドを作りたいと思い立ち、気仙椿を使ったハンドクリームの製造販売にこぎ着けた。他国の女性達との幅広いネットワークを持つバイタリティ溢れる渡邊さんにその思いやり組みを語つていただく。

### 中高校生へのメッセージ

自分は何がしたいかとか、何をしている時が楽しいかを知る事が大切じゃないかな。あとは勉強も大事だけど、よく遊ぶ事かなと思っています。大人になって思い出すのは勉強の事じゃなくって、あの時あんな風に悩んでいたとかいう経験。自分にとって何か楽しいか、興味があるのかを考えつつ、沢山遊んでください。

## 将来のビジョン

被災地と言われる場所や途上国と言われる場所には、これから社会の在り方のヒントがあるんじゃないかと思っています。都市と地方、あるいは大企業と地域企業は、それぞれのスピード感、それぞれの違つた力を持っている。そして、それぞれ互いの価値観や持つているものを提供したり、学び合つたり出来ると思うんです。私はその橋渡し役としてビジネスを成功させてモデルを作りたい。さらにもう少しアカデミックの力も付けたいと思っています。

ですが、地元では一部の実を拾つて食用油にしているだけで、椿の実のほとんどは使われていませんでした。そこで、この種を使って化粧品にする事で、付加価値をつけ、新たな産業に出来ないかと考えました。しかし、現地の方々と事業構築をしていく事は容易ではありませんでした。それでも、地域を元気にしていくためには、経済・産業が必要だという強い信念で粘り強く説得を続けました。商品開発や製造には東北支援に取り組む女性医師の会や化粧品メーカーが協力してくださり、2012年11月に気仙椿ハンドクリームの商品発表をする事が出来ました。

一方、カンボジアの女性が美容技術を身につける場を作ろうという活動にも取り組んでいます。カンボジアでネイルサロンを経営している女性起業家との出会いがきっかけです。カンボジア国内では美容について質の高い技術を教える場がないため、日本から専門の技術者を派遣してサポートしていく、将来は技術を学べる学校を作りたいと考えています。実は私は11歳の時に初めての海外としてネパールを訪れていました。そこで目にしたのは日本では知る事のなかつた世界でした。子どもながらに感じた「豊かさとは何だろう」という事をその後も常に考えるようになりました。その時に感じた事が、今の私を作つてゐるんですね。経験つて本当に大切だと思います。

# 400年後の 仕事づくり

ものづくり

震災から現在

震災以前のこと

震災前は東京で大学院生をしていました。修士論文を書き終えて、古里に戻っていたときに地震が起きました。地元の町づくりのNPOに就職も決まつていきました。卒業のタイミングで震災が起き、卒業式も流れ、卒業証書も取りに行けないまま時間が経つてしまいました。

地震が起きた時は本屋にいて、本が倒れてくるのを恐れて駐車場に逃げました。まず、家族の安全確認をして、少し落ち着いてから車にガソリンを入れに行きました。地震の全容も分らない今まででしたから、明日からガソリンが値上がりするかもしれないという軽い気持ちでした。まさか無くなるなんて思いもしませんでした。その後、何か出来る事をやりたいと思い、弟と2人で帰宅困難者を避難所に車で送り届けるボランティアをしていました。

その後、テレビで色んな映像を見て凄くショックを受けました。そんな中、3月15日から会津でおにぎりの炊き出しのボランティアを始めました。4月に就職するまで、その活動は続けました。

NPOで働きながら、何か自分に出来る事をしたいという強い思いを抱いていました。会津には元々仕事がないと言われていましたから、避難して来られた人たちがしばらく会津に住むにしても仕事は足りないだろうと感じていました。僕も就職して1年も経っていないから出来る事は限られていきましたけれど、小さな手仕事という形であれば、何か出来るのではないかと思つていました。そんな時、雑貨の販売を始める事になった知人の声を聞きました。「会津の物でもっとお洒落な雑貨が生まれてきたらな」ならば、仮設住宅で手仕事の雑貨を作つてもらう事が出来たら、地域のお店にも避難されて

株式会社 iie(イー)  
代表取締役  
谷津 拓郎さん  
【福島県】

モノを  
つくる



谷津 拓郎さん

谷津さんは、会津に避難してきた大熊町の皆さんに何か仕事をしてもらいたいという思いから、伝統工芸の会津木綿を生かす事業を立ち上げた。会津木綿の美しい色合いを生かし、糸をほぐしてフリンジにしたツールが誕生した。伝統工芸とは何か。その未来を語つていただく。

大人になって思った事は「大人は意外と面白い」という事。自分が中高生の時は、大人になる事はつまらない事だと思っていたけれど、そうではなかった。暗いニュースが多くても、皆さんの未来が暗いわけではない。悲観しすぎず、今を楽しんで欲しいです。

将来のビジョン

これから先5年10年に向け、今は、もう一度事業を考え直す時期だと思っています。今までの良い部分は良い部分として続けつつ、もつと地域の役に立てる事を探して、地域の方のお話を聞かせていただいている。新しい挑戦を通して会津木綿の産業と文化の発展に貢献したい。それ400年前に生まれた産業で働く自分のように、次の400年後の仕事作りに繋がると思つています。

いる方にも喜んでもらえるのではないいか。

働きながらその年の暮れに活動を開始し、翌年の3月にNPOを退社しました。ものづくりを考える中で、まずは地元の物を使いたくて会津木綿に着目しました。加工がし易く、ミシンを使って作業をしたら、何となく楽しいだろうなというイメージもありました。布自体もすごく綺麗。最初は会津木綿の事はあまり知らなかつたのですが、やっていくうちにどんどん好きになつていきました。風合や縞柄はもちろん、会津の歴史が織り込まれた木綿です。

現在は仮設住宅の方に、会津木綿のツールのフリンジづくりを主にやつていただいています。フリンジというのは布の端の装飾で、ほつれ止め加工になります。実は「私はミシン出来ないから…」という方がいて、それじゃあミシンを使わなくとも出来る仕事を作ろうと思い、手作業で出来るフリンジにたどり着いたんです。最初から販売が好調だったわけではないのですが、頑張ってPRをして今に至っています。新しい形を摸索しながらやつてているような状況。この先もう1年くらいでしっかり形にしたい所です。地域の力をお借りしながら、一つずつ丁寧にものを作り出しています。

# 世界を目指せ

## 「ミガキイチゴ」



震災から現在

24歳の時にIT関係の会社を立ち上げました。私は宮城県山元町の出身ですが、そこから上京して大学に入り、在学中に会社を作つたんです。その会社を10数年経営してきた時に震災が起きました。

ものづくり

復興  
とは

株式会社GRA 代表取締役  
岩佐 大輝さん  
【宮城県】

震災の日は休みで、東京都内の自宅にいました。もの凄く揺れてすぐにテレビをつけました。そうしたら自分が良く知っている町が津波に飲み込まれていく映像が映し出された。驚きました。古里は全壊したのかもしれないと思いました。電話は繋がりませんから、山元町にいる両親の安否すら分からず、とにかく不安でした。震災の翌日か翌々日に、車にありつけの援助物資を積んで山元町へ向かいました。幸い両親は無事でしたが、そこには変わり果てた古里の姿があり、衝撃を受けました。

山元町は人口のおよそ4%の人が亡くなってしまった。生きている自分に出来る事って何だろうと、自問自答しました。まずは出来ることからとボランティア活動を始めました。一旦東京に戻り、経営者仲間やMBAをとるために通っていた大学の仲間と団体を立ち上げ、震災の翌月から毎月ボランティア活動に足を運びました。

活動の中で、町の人たちから言われたのは「君たちはビジネスパークだ。泥かきはありがたいが、働く場所を作ってくれ」と。その言葉を聞いて、これは自分の使命だと感じましたね。これまで学んだ事を古里の復興のために使わないでどうするんだ、という使命感も湧いてきました。ボランティア活動をしながら、震災前は町の経済を支えていたイチゴの再生に全エネルギーを傾注しました。こう



して2012年1月、仲間と農業生産法人の株式会社GRAを立ち上げました。

実は震災前まで、古里のために何かしたいという思いはありませんでした。離れて長い年月が経っていましたから、戻つて何かすることは夢にも思わなかつた。でも、震災を経験して、あの現場を見て、いろいろな方々と出会つて、たくさんの事を学んで、今こそ東北に身を捧げる時だ、と決意に至つたわけです。

GRAの事業の柱はイチゴの生産と販売です。津波被害を受けた土地に太陽光利用型の植物工場をつくり、栽培しています。農業とITを融合させているんですね。収穫したイチゴは「ミガキイチゴ」というブランド名で全国販売しています。生産だけでなく、ブランディングなども手掛けています。ミガキイチゴは2013年度のグッドデザイン賞を受賞しました。1粒1000円の値段がつくんですよ。

まずは山元町のイチゴ作りを今以上に安定させたい。次に、新しく農業をやろうとしている新規就農者を支援するビジネスをやつてみたい。それと、今インドでもイチゴを生産していますが、他の国々でも需要があるところへ行ってイチゴ作りを始めたい。こんな事に力を入れていきたいと思っています。

### 将来のビジョン

岩佐さんは、故郷の山元町をなんとかしたいといふ思いから震災後すぐにNPOとしての活動を開始。被災してほとんどが失われたイチゴの生産現場をなんとか復活させたいと奔走している。学生時代に起業して一企業を営んでいた岩佐さんは農業の今と未来を語つていただく。



### 岩佐 大輝さん

岩佐さんは、故郷の山元町をなんとかしたいといふ思いから震災後すぐにNPOとしての活動を開始。被災してほとんどが失われたイチゴの生産現場をなんとか復活させたいと奔走している。学生時代に起業して一企業を営んでいた岩佐さんは農業の今と未来を語つていただく。

# 会津の伝統野菜で 繋がりを広める

長谷川 純一さん

震災以前のこと

うちは分家なんですが農家の5代目として農業をやつしていました。冬の間はスキー場の仕事もしていて、地震のあつた時も磐梯山の山小屋にいました。

## 震災から現在

かなりの揺れがあり、まずは安全確保のパトロールをし、家族の無事を電話で確認し、消防団に入っているので、対策本部へと向かいました。津波の映像を見て、ひょっとしたら原発が危ないんじゃないかと思っていた矢先、3号機の爆発があり、本当にショックでしたね。

ハウスの葉物を避難所に届けて、喜んでもらっていたんですが、他所の検査で放射能が検出されて福島県全域の野菜がストップしてしまった。そんな矢先、ある取材で清水君と出会ったんです。

元々、会津伝統野菜を守る会という活動をしていました。地元の農業高校へ教えにも行っていました。震災では辛い事もありましたが、清水君には「会津御種人蔘を育てたい」という熱意と、這い上がる力強さがありました。今では伝統野菜を一緒に育てています。

## 将来のビジョン

行政も何とか伝統野菜を守り育てようとしている。実際に育てる農家は大変な苦労をしなければいけない。でも、個々の農家、地域、集落が繋がる事で力が出てくる。農産物が繋がる事でいろんな人との繋がりも広がる。そんな思いで伝統野菜を作っていきたいですね。



人と種をつなぐ会津伝統野菜  
長谷川 純一さん  
清水 琢さん(左)

【福島県】



長谷川純一さん 清水琢さん

大量生産大量消費の時代の流れで、日本各

地の伝統野菜が姿を消しつつある中、長谷川さんと清水さんは震災を機に会津の伝統野菜の大切さを痛感。「人と種をつなぐ会津伝統野菜」を立ち上げた。伝統野菜とその記憶を大切にし、未来を紡ぐとは何か。2人に語つていただく。

### 長谷川さんから 中高校生へのメッセージ

農業には未来があります。若いうちに是非、食べ物を育てる喜びを体感してください。作物は手を掛けた分だけ応えてくれます。

### 清水さんから 中高校生へのメッセージ

食べるという事は人と繋がるという事。時には作っている人に会いに行つてください。そして、心と体で感じる経験をしてください。

### 将来のビジョン

会津を漢方の里にしたいと思います。薬草を探つて来ててくれる人、乾燥や選別などに携わってくれる人、そして使つてくれる人。すべての人にもつと食べてもらおうという思いを強く持つようになりました。伝統野菜を守り育てている長谷川さんと出会い、人と種を繋ぐという思いに共感を覚え、会津御種人蔘を会津の人に愛してもらおう、そして国内の人にもなるよう、頑張つていきたいです。

# 魚と人を繋ぎ直す

くらし

食を  
守る

生まれも育ちも静岡。大学2年の時、キャンパスが三陸町（現在の大船渡市三陸町）にあったので移り住みました。魚の現場に入つてみて凄さや旨さなど驚く事がたくさんあって、消費者の感覚としてマーケットと繋がるんじやないかと思つてホームページを作るアルバイトをして、卒業後に「三陸とれたて市場」を立ち上げました。船にライブカメラをつけて、浜の物語のような事をインターネットで発信し、魚と人を繋ぎ直すような事をやっていました。

## 震災から現在

震災の日はスタッフ全員が社内で作業をしていました。凄く大きな揺れがあつて、津波が来るんじやないかと、皆で海拔300メートルほどの山のてっぺんまで坂道を登りました。頂上まで行ったものの、しばらく経つて町の状況が全く分からなかつたら山から下りたら、町がまるきり消えていました。もの凄い事が起こつたのは認識出来るけれど、何が起こつたのか理解出来ない状況でした。30分ほど前までいた会社も町も、がれきの山になつていたんです。

避難所で一晩明かして翌日、作業をしていた浜の方まで行きました。がれきが溢れていて、一体どこから片づければいいんだと途方に暮れましたね。自分たちで片付けを始め、人的な被害の規模が見えてきたのが地震から3日目ぐらいでした。

それから少し経つて漁業者の方に被害の状況を確認しました。何が残っているのか、がれきがどうなつているのか、出来る漁業つてあるのかつて。どうすれば最短で立ち上がりつていけるのか。避難所の前にテントが張つてあつたんですけど、そこで焚火をしながら皆で意見を交わして励まし合つていました。

そんな中、4月11日に岩手県が復興宣言をするという情報が入



有限会社 三陸とれたて市場  
代表取締役  
**八木 健一郎 さん**  
【岩手県】



## 八木 健一郎さん

大学時代に初めて三陸地域にやつてきた八木さんは、漁師さんたちと新たな試みを次々と実施しながら魚を売つきました。まだBtoCなどは想もつかない頃に、船上でライブカメラを使って販売したり、京王プラザホテルと組んで食材を開発したりしてきました。震災後は同じレールを敷き直すのではなく、新たにレールを敷き直すことが復興だという八木さんに、新たな日本の水産業について語つていただきました。

**中高校生へのメッセージ**

等身大っていうのか、肩肘を張らずに裸の自分でお互いがぶつかり合える時こそ、素晴らしい物が出来上がります。無垢である事の大切さですね。ミサンガがまさにそうでした。子どもの時に持っている無垢な感性を消さないで自分を信じてください。

## 将来のビジョン

自分たちが三陸の町の中で作つてきた漁業者との関係を、少し離れた場所の漁業者たちとも同じ構造で作つてみて、その漁業者たちが得意とするものがもつと消費の現場を喜ばせるようなツールに出来ないかと考えています。少しずつですが、構造を広げていきたいですね。

震災以前のこと

# サカナ伝えて、 国興す

くらし

食  
守  
る

## 震災以前のこと

震災が起こった時、私は日本の水産業を守り育てる国の機関「水産庁」で働いていました。特にこの10年間は日本人が昔に比べて魚を食べなくなっている事を踏まえ、日本の漁師が減り、私たちの暮らしから魚が消えてしまう不安、そして、もしそうならば、海に囲まれた島国である日本は自分の力で生きていけない国になってしまかもしれないという危機感から、雑誌やテレビなどに出演しながら、家庭で簡単に出来る魚料理を伝え続けていました。

## 震災から現在

地震があつた時は自宅にいました。普通ではない大きな揺れを感じて直感的に近くの海へ行きました。目の前の湾の中が沸き立つように逆巻いて水位がみるみる上がり、海に注ぐ川が逆流しており、沖で途方もない大きな地震があつて津波が起きたのだと思いました。

私は阪神淡路大震災や福井県で発生したナホトカ号重油流出事故では、災害が起つてすぐに現場に入り、支援活動をしてきましたが、今回の震災は発生した地域の範囲からみれば、自分が出掛け行って体を使つて作業するというようなレベルではない事が明らかでした。結果的に被害の大きさは津波や原子力発電所の爆発による直接的な被害だけでなく、流通の停滞やその後の放射能の影響を含め、日本の国土の3分の1が、かつて経験した事のない深刻な事態になり、日本全体の経済に影響を及ぼしていました。

将来的に被災地の水産業が復活したとしても、消費が落ちないよう受け皿を作らなければ、復活させた意味がありません。食料産業には「買って食べてもらえないものは、獲る意味もない」という事実があり、これは商売の原則でもあります。私はこの事を踏まえ、被災地ではなく、いろんな仕事をしている人たちを繋ぐ必要があったのです。



株式会社ウエカツ水産代表  
東京海洋大学客員教授  
**上田 勝彦さん**  
【神奈川県】

消費地である消費地市場へ出掛け、水産業に繋がりのある色んな業種の人たちと共に「東北の水産復興を考える会」を立ち上げ、被災地の現状についての情報共有と復興を支えられる受け皿の強化について相談を続けました。

「被災地を支援します」という言葉を口にする限り、「買って、食つて、支える」。その覚悟を消費地が崩さずに継続する事が出来れば、被災地の漁業、ひいては日本の漁業と魚食は間違なく蘇ると考え、食堂を開いたり、イベントやメディアで魚を紹介したり、あらゆる形で魚と人を繋ぐ活動を展開しました。そして、そのためこそ、人と人、役所と国民、いろんな仕事をしている人たちを繋ぐ必要があったのです。

## 将来のビジョン

震災が起きてから4年目に入った2015年4月。私は23年間勤めた水産庁を辞めました。被災地だけでなく、全国各地から依頼相談される仕事が増える中、役所の仕事に費やす時間が負担になってきたという事もありましたし、担当が私ひとりでは間に合わなくなってきたという事もあります。自分の代わりを出来る人も育てないといけません。しかし、こなさなければいけない仕事が決められている組織の中においては、それは難しいのです。

全国に魚を伝えるには体力も気力も必要です。年をとつてからでは出来ない事もあります。50歳になり、これから先の20年の為に早めに退職し、6月に株式会社ウエカツ水産を立ち上げました。スローガンは「サカナ伝えて、国興す」です。日本全国にもう一度、かつての日本食のように世界が認める理屈的な、魚を中心に米、野菜、時々肉のバランス食を投げ掛け、日本の生産環境と風土に最も適した食事のかたちを伝え続けます。

## 上田 勝彦さん

上田さんは「ウエカツ」の愛称で親しまれている元水産庁の名物男。魚離れを危惧し「どうしたら食卓に魚が乗るか」を懃れ懃れするような名口調で、各地で講演している。料理を教えるのではなく、「仕組み」を教えるという画期的な手法で魚に親しめるよう食育活動を展開している上田さんに日本人の暮らしと魚について語っていただきました。



## 中高校生へのメッセージ

好き嫌いの判断ではなく、自分が大切だと思える事に向かってみて欲しい。自分が暮らしている社会に、いつの日か何かを通して貢献できる、そのような自分の役割のようなものに出会えたら、それこそがアナタが存在する意味、生まれた証だと私は思います。



# ワークシート

パッショング / 情熱

ビジョン / 世界観

ミッション / 使命

スキル / どんな能力が必要でしょうか？

スキーム / どんな仲間がいればできるのでしょうか？

## 三井物産の東日本大震災復興支援活動

当社は、震災が発生した直後から、義捐金や救援物資の調達・提供等、いち早く緊急支援活動を開始しました。それから4年半余りの間、甚大な被害を受けた被災地の変化に応じ、当社の復興支援活動も様々に広がっています。その活動の一部をご紹介します。



### 役職員によるボランティア活動

瓦礫撤去や倒木清掃など、被災された方々の生活再建のお手伝いからスタートしました。現在でも現場のニーズに応じて内容や形を変えながら継続しています。

### 社有林材を使った仮設図書館の建設・寄贈

当社が所有する社有林「三井物産の森」の木材を使い、陸前高田市に仮設図書館を建設・寄贈しました。子どもたちの読書や地域の方々のコミュニケーションの場として活用されています。

### 三井物産環境基金による助成活動

地球環境問題に配慮した復興支援活動を行う団体や組織を助成し、生活の再建や持続可能な地域社会の実現に向けた取り組みを支援しています。

### 復興活動ドキュメンタリー番組の制作・放映

復興支援ドキュメント「未来への教科書～For Our Children」を制作し、BS12チャンネルで放映しています。大震災による困難を乗り越えていく人々の姿を紹介し、日本人の持つ強さ、素晴らしい姿を未来に伝えています。

### 消防殉職者遺児向けの奨学金提供

発災後の救援活動で殉職された多くの消防関係者や一般市

民の子弟の皆さんのが、夢や希望を持ち、存分に学べるよう、「東日本大震災消防殉職者遺児育英基金」を通じて奨学金を提供しました。

### 地域の活性化に繋がる事業の創出

水産加工業の高度化や新たな雇用創出へ向けて、「気仙沼水産加工団地」の開発に取り組む気仙沼鹿折加工協同組合の活動を支援しています。また、東北最大級となる「仙台うみの杜水族館」を2015年7月に開業しました。



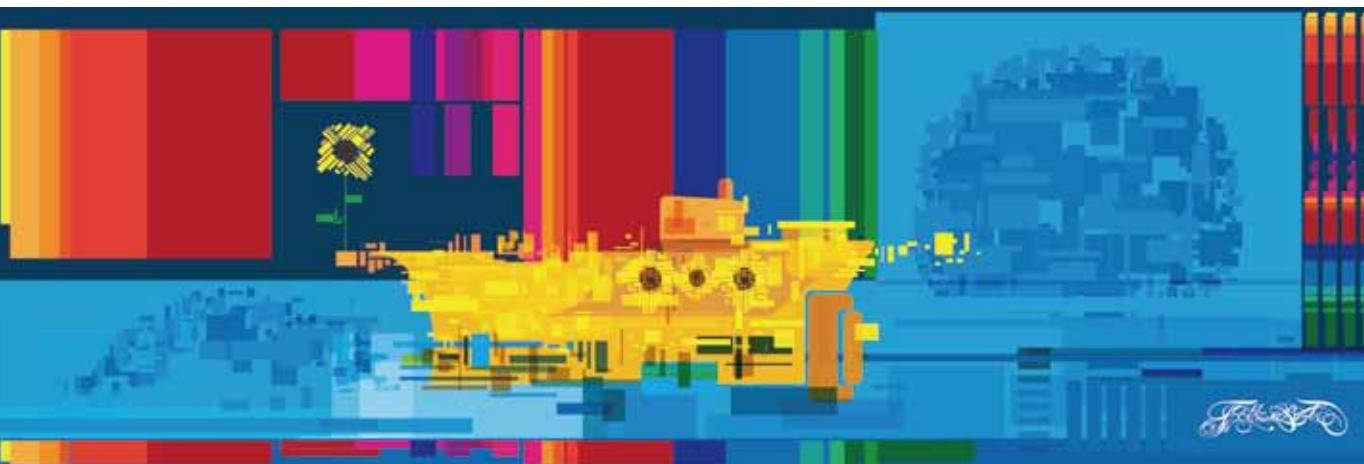
仙台うみの杜水族館

### 三井物産ウェブサイト 「東日本大震災への対応」

[www.mitsui.com/jp/ja/csr/contribution/disaster-relief/](http://www.mitsui.com/jp/ja/csr/contribution/disaster-relief/)

気付いた事をメモしましょう！

気付いた事をメモしましょう！



Shiawase-maru illustrated by João Elias de Brito for Mitsui & Co.

主 催 : RA 復興支援メディア隊  
(事務局: 合同会社アースボイスプロジェクト)

後 援 : MITSUI & CO.

企画協力 : ワールド・ハイビジョン・チャンネル株式会社



# 世界をつなぎ、人を育て、地球を守る。 夢あふれる未来作りのために。

三井物産は、「国際交流」「教育」「環境」の3つのテーマを中心に、世界中でさまざまな社会貢献活動を進めています。大切な地球と、そこに住む人びとのこれからのために、私たちができるることを、ひとつひとつ。



## サンクトペテルブルク 国立大学冠講座

ロシアにおいて、日本への理解と相互交流を深める取り組みを行っています。



## 北京大学三井創新論壇

日中経済および文化交流の促進を目的とした冠講座を開催しています。



## 米国三井物産財団の活動

教育や地域福祉などの幅広い分野において、アメリカ社会に貢献する活動を進めています。



サンパウロ大学での冠講座開催や、帰国した日系人子弟の現地学校への適応支援などを行っています。



## 三井物産「サス学」アカデミー

「サス(サステナビリティ)学」とは、未来の担い手である子どもたちが、持続可能(サステナブル)な未来を創る力を育むための学びです。「サス学」を通じ、子どもたちの「未来を創る力」を応援しています。



## 三井物産環境基金

未来につながる社会を目指して、環境貢献活動を行うNPO/NGOや環境分野の研究を行う大学等の研究者に対し震災復興支援を含めた幅広い助成を行っています。



## 森のきょうしつ

「三井物産の森」での森林体験や、学校への出前授業に加え、ウェブサイトでも森の役割と木材産業を通じた環境保全を伝えています。



## 在日ブラジル人支援活動

在日ブラジル人学校児童向け奨学金などの子弟向け教育活動や、NPO団体への支援などを行っています。